



うむい

令和6年度 皇紀2684年

題字:宮里洋子(沖縄県護国神社前事務局長)

社報「うむい」について

沖縄の言葉で「想い、願望、考え、所存」のことを「ウムイ」といい、戦争で亡くなっていた人達の思い、そして残された遺族、戦友達の想いを次の世代へと継承すべくつけられた名前。

日清戦争以後、敢然と国難に立ち向かっていた先人たちの尊い精神が、この「うむい」を通して末代まで受け継がれ、真に戦争の無い平和な世の中になるようにとの願いが込められている。



祈願受付

お守り 古札納所

御挨拶 代表役員(会長)比嘉 良雄
疫禍沈静後の社頭
各種行事報告
未来への提言 岡出 とよ子様

特集 沖縄県護国神社の歩み
第8回「神社境内への植樹」

宮司 加治 順人

御祭神の遺籍調査
令和5年度書評



HP



Twitter



インフレの時代　さてどうしよう

沖縄県護国神社代表役員会長 比嘉良雄

庭の草とりを手伝った弟に「そばを馳走しよう」と誘つたら、「少し遠いけど中部においしいそば屋があるよ」という。車を走らせた。うまい！勘定を願つたら「お一人様千円」という。おもわず「高い」とうなつた。弟は「ソーキ骨がひとり多いよ」と笑つた。

若い頃よく半そばを食べた。コーラ一本程の値段だった。今でも時々行くが那覇でも名護でも八百円前後だ。二十五%も値上がりしたのか…。

今、春闌のさかりである。大企業はほぼ要求通り百分で妥結。中小企業に注目が移っている。政府も世論もほぼ大幅値上げ是の方向である。ガソリン、ガス、電気、タクシー、食材も値上がりしバスも値上げ申請中である。沖縄県の土地の値上がり率は全国二番目という。デフレ脱却を通り越していきなりインフレ到来である。ブラジル帰りの先輩から聴いた話。「同国が悪性インフレに襲われた、沖縄県人社会は『模合社会』一番先に落札した人はそれで車一台買えた

が、十二カ月後もらつた人はタイヤ一本のお金になつてた…と。

対策が必要になつてきた。その具体的な例にもなるうか。

我が沖縄護国神社は創建八十八年で近く九十年。十二年後には百周年を迎える。すぐる大東亜戦争で灰燼に帰したが昭和四十年、具志堅宗精、屋良朝苗氏らの尽力により再建された。だが、あれから六十余年、各所に痛みが生じ改築が必要になつてきた。それに備えて神社では黙々と資金を積み上げて現在二億五千万円になっている。

造営委員会の試算によると現時点で着工すると五億円という。あと二億円はこの五年で積み上げ、残る五千万円は崇敬者や関係企業のご奉賛を仰ぐ計画という。

だがインフレが進むと建築資材、大工賃の高騰で七億、八億円にふくらむことが予想される。さてどうしよう。積上った二億五千万円を増す方策はないか。

現在は銀行に定期預金されているが利息

は〇・〇一%で雀の涙だ。「株式を運用する証券会社に相談してみようか」と役員諸子や宮司、事務局に話すが「N.O.！」とは言わないがそれ以上踏み込めない雰囲気だ。

宗教法人の性格上当然かも知れない。株は暴落した時に積立が減る。

ならばどうしよう。

先づ隗よりだ。我が師具志堅宗精は株式に投資、一年間の全利益を神社再建に寄進している。当時の一千ドルだ。

私もそれにならおうと決めた。寄進の前

払いた。購入株式の候補は沖縄セルラー電話、トヨタ自動車、NTT、東京エレクトロン、エヌビデオだ。各々合計百万円で合計五百萬円。

身近な企業なので崇敬者も協力しやすい

だろう。ダブル・トリプルバーガーがねらえるかも知れない。沖縄戦体験者の生残り世代の一人。十七万余の「みたま」への最後の奉仕として準備をはじめたい。

※模合とは本土でいう無尽や頼母子の事です。



疫禍沈静後の社頭

数多くの生命を脅かし、経済活動を停滞させた疫禍（新型コロナウイルス感染症）は去る令和五年五月八日に一類相当から五類感染症に移行されました。この疫禍沈静は八百万の神々の御神徳に依ることとは申せ、自らの身を顧みず重き責務を果たされた医療従事者、公的機関の皆様、そのご家族、そして他者を思いやる心を忘れず、できうる限りの各自の務めを果たされた日本国民の至誠による所も又大きかつたと存じます。しかしながらこの五類に至るまで多くの尊い人命が幽明境を異にされたのも事実でござります。沖縄県護国神社奉仕者一同、今回の疫禍によりかけがえのない命を失つた数多くの、ご遺族、戦友、崇敬者、関係者の皆様に心よりの弔慰を表すと共に、今だ後遺症に苦しむ方達の上に降りかかる病魔が一刻も早く取り去ります事をご祈念申し上げます。

さて当社では段階的に解除してきました疫禍に対する社内措置のほぼ全てを撤廃し疫禍流行前の状態に復す事と相成りました。一例を挙げますと秋の大祭よりは清興や居合演舞、七五三の時期では衣装無料着付けの実施、お正月では株式会社ジーマ様、ジーマックス株式会社様奉納によるお神酒のお振舞いや那覇市青年会議所による餅つきなど様々な行事が復活いたしました。又正月三ヶ日の参拝者は疫禍前を上回る二十七万三千人の方がお詣りになられ、ご社頭は常の年に増して笑顔と笑い声が溢れていました。

話は少し変わりますが、かつて國學院大學教授の森田康之助氏は「お宮に御参拝いたしますと御祭神がお喜びになる。お喜びになるという事は御祭神



の活力がいよいよ高まり強くなる。英靈はこの国を思つて散華したのだからその活力は国の力となるだろう。そして参拝者は御祭神にお目にかかることによりその人の心が安らぎ新たな活力を得る事ができる。参拝にはそのような「面性がある」という趣旨の事を語られています。

皆様、疫禍も五類になりました。ですので是非、境内の桜を見にいく、出店で美味しいものを食べたい、空港に行くまで時間があるから、たまに那覇に出てきたから、そのような些細なきっかけでも結構でございますので、当社にお越しになり少しの間手を合わせ御祭神の事を思つていただければ幸いでございます。されば御祭神はお喜びになり、我が國も皆様もますます豊かになる事とご拝察申し上げます。

第六十五回
秦本別之茶

四月二十三日第六十五回春季例大祭を斎行いたしました。まず祭典に先立ちまして、当社に篤い崇敬心をお寄せいたく(株)コニツシユ様より米俵三俵の奉納がございました。又、祭典中には華道家元池坊沖縄支部様が献華の儀を、茶道裏千家淡交会沖縄支部様による御奉茶の儀がそれぞれ執り行われた後、「みたま慰めの舞」を奉奏いたしました。祭典終了後、特攻兵士と同じ時を過ごされた事がある岡出とよ子様による「特攻兵士魂の叫び」と題した講演会が行われ、その後「あゝ特攻」勇士之像特攻隊戦没者慰靈祭が執り行われました。尚、次頁に岡出様より頂いた皆様へのメッセージを掲載しています。



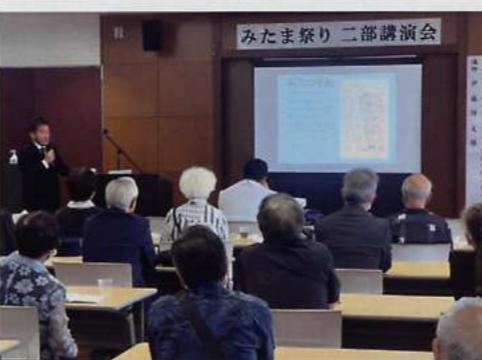
沖縄戦全戦歿者慰靈祭

河綱軍において、河綱的抵抗が終結したとされる六月二十三日に沖縄戦全戦歿者慰靈祭を斎行いたしました。正午に默禱を捧げ、その後国歌斎唱、宮司祝詞奏上、巫女による「みたま慰めの舞」の奉奏と滞りなく祭典を執り行うことができました。尚、疫禍も五類に鎮静したことにより昨年を大きく上回る八十名ほどの参列がありました。



終戦記念日みたま祭り

大東亜戦争終結ノ詔書が下され
てより七十八年の歳月が過ぎ
ました。当社では英靈にこたえ
る会沖縄県本部共催また、沖縄
県遺族連合会、日本会議沖縄県
本部の後援により終戦記念日み
たま祭りが斎行されました。又、
祭典終了後、「伊藤半次の絵手
紙」の著者である伊藤博文氏を
講師に「戦時中の絵手紙で伝え
る家族の絆・平和の尊さ」と題
した講演会を行いました。



第六十五回
秋李判大案

秋晴れの十月二十三日、第六十五回秋季例大祭を斎行いたしました。今回は四年ぶりに奉納芸能「田場盛信民謡ショー」が開催されるなどご社頭の賑わいも格別でした。尚、祭典中にはM.O.A山月光輪花様が獻華の儀を、無外流明思会様（P3写真右下）による奉納演武がそれぞれ行われました。久方ぶりの通常祭典としてご遺族崇敬者ご参列のもとに厳粛に秋季例大祭が執り行われました事、恂に嬉しき事に存じます。



沖縄県護国神社
前宮司

沖縄県護国神社伊藤陽夫前宮司が去る令和五年十二月二十九日に（享年八十五歳）ご逝去されました。

明治神宮をご退職後、御靈移住、その後平成十七年に年より七年間宮司として当き道をお示し下さりました

在位中に創建十五年詩文事業の桜痴所造宮を始め天皇皇后両陛下（現上皇上皇后両陛下）御製・御歌の歌碑建立の大事業を成し遂げられました。また、総代会を発足させるなど多岐二つに亘り大成功を収めました。ふつて、二里

敬仰の念深く本誌にて連載を持ち、書籍『大御心と沖縄そのI』『沖縄にそそがれる大御心』を始めその他多くの書籍を上梓されま

した 職員一同
伊藤前宮司の功績
に感謝すると共に
心から哀悼の意を
表します。



平成23年4月23日 歌碑除幕式にて

未来への提言

四庫全書

令和四年十月、沖縄県護国神社様に特攻兵士辞世の句、三十四首をお納めさせて頂きました。天皇様、沖縄御訪問の榮ある日でございました。天皇家いやさかを御祈願の後、特攻兵士辞世三十四首をお納めする事が出来ました。

ぬの熱き心を兵士様たちは強いら
れました。育てられました。誠一筋
でいかれました。私は両親とお見
送りしまること。五歳の子供さら須

一生忘ることは出来ません。遺族の方と交流させて頂きました。

の五才頃電車に手を振つてゐる写真があります。あれは兵隊さんに

と、お顔も判らないのに、なつかしく涙の出る思いでござります。『特攻兵士 魂の叫び』の冊子を出し色々の方面にもらつて頂き、数は



特攻兵士の辞世の句を紹介する岡出様

特集



神社境内に青々と茂る樹木



拝殿後方 大木となった琉球松



裏千家鵬雲斎千玄室
元による記念植樹



本土復帰50周年記念植樹

戦争が終結し、しばらくは皆生きることで精いっぱい、県内の緑地は荒れたままの姿をさらしていました。そのような中、米軍政府が主体となり県土緑化の重要性を普及啓発するため緑化推進運動が行われ、その一環として「第二回軍官民合同記念植樹祭」が開催されることになりました。この植樹祭はまだ戦争の傷跡が各地に残る昭和二十六年二月に「荒れた郷土に希望の植樹」をテーマに那覇市小禄で開催され、「沖縄県植樹祭」と名称を変え、今も毎年行われております。

その第二回目が昭和二十七年二月に奥武山公園にて開催され、モクマオウ、イヌマキ、ソウシジュ、センダン二百本が植えられました。そして、昭和三十年二月に五回目の開催地として護国神社が選ばれモクマオウ、ソウシジュ千本が植えられました。

そして昭和三十八年十二月に、那覇市主催の緑化運動植樹祭が奥武山公園を行われ、その中心地として護国神社境内に大田政作行政主席を緑化本部長とし、西銘順治那覇市長を那覇市緑化支部長として植樹が行われました。植樹祭では那覇市の職員百五十名が参加し、ココヤシ四十本、琉球松百二十五本が境内や公園内に植えられました。

また、昭和三十四年の仮社殿建立後、神社が主体となって、境内及び神社周辺に琉球松百四十本、モクマオウ、イヌマキ、ソウシジュ、センダン二百本、梯梧（ディゴ）六本、ビロー十四本、キヌガシ八十多本が植えられ、社殿が再建された昭和四十年一月に、琉球政府から配布された琉球松十本が境内に植えられました。それらの樹木はいずれも大木となって境内を包み込んでいます。

同年十一月十九日靖國神社筑波藤磨宮司、北白川祥子様参拝記念植樹、昭和四十一年六月二十三日に山口喜久郎衆議院議長、同年七月二十五日に武内竜次駐米特命大使、同年八月十六日に森清総務長官、昭和四十四年十月裏千家鵬雲斎千玄室家元、昭和四十五年五月二十日に山中貞則国務大臣による記念植樹が行われました。



佐藤栄作総理による記念植樹

また県内からも、仮社殿建立を記念して昭和三十四年四月に安里積千代より梯梧六本が植樹され、昭和三十九年五月にオリオンビル創業者で神社の初代代表役員具志堅宗清氏よりマツコウ、柳、竹が境内に植樹されました。当時植樹された樹木は公園内整備事業や神社施設設備のために移植、または生育不良のためやむなく伐採されたりもありますが、現在もその多くが青々と生い茂っています。

最近では、沖縄本土復帰五十周年記念植樹として令和四年五月十五日に靖國神社山口建史宮司、全國護國神社會会長塩野谷恒也北海道護國神社宮司、熊野速玉大社上野顯宮司によります桟の樹が植樹されています。

「桟の樹」は、熊野速玉大社の御神木で、その葉には災い除けの意味があります。また桟の字は木編に那覇の「那」からなっており、那覇市の守護にもつながります。

戦争で荒廃した神社境内や奥武山の杜は、沖縄県、那覇市、遺族会青年部、県内外の政治家や著名人等大勢の方々の復興への思いにより、再び神社境内及び公園内を戦前と同様緑深い奥武山の杜となり、訪れる参拝者、公園利用者を包み込んでいます。



沖縄県護国神社は昭和11年の創建から数え、今年で88年目を迎えます。特集「沖縄県護国神社の歩み」と題し、11回にわたって神社の創建から現在までを紹介していきます。

那覇市の市歌二番の歌詞に「みどりも深き奥武山めぐる入江の水なごみ」とうたわれている奥武山は、緑豊かな景観地として親しまれ、その中心に護国神社が鎮座しています。

しかし、昭和二十年の沖縄戦によりその景観は「変し、荒れ地となり、かつての面影は鳥居のみという状態となりました。

今回の神社のあゆみは、荒廃した境内が再び緑深い杜として今の姿になつたのかを書き記したいと思います。

護国神社が鎮座する奥武山は、古くは琉球松が生い茂る風光明媚な景観地として親しまれ、葛飾北斎の琉球八景にも松林の島として絵かがれていました。

昭和十一年に建立された護国神社境内も松の木立に覆われ緑深き神域です。

昭和十一年に建立された護国神社境内も松の木立に覆われ緑深き神域でした。



松の木立に覆われた戦前の神社境内

第八回 神社境内への植樹

宮司 加治 順人

沖縄県護国神社の歩み

社務日誌抄

令和5年4月～
令和6年3月



靖國の社で初心に立ち返る

(靖國神社秋季例大祭奉仕所感)

松元孝太

令和五年十月十七日、同十八日に齋行された靖國神社秋季例大祭並びに臨時大祭に全國護國神社會助勤奉仕員として派遣された。

当職は奉職以来、自社にて御英靈の神威を宣揚すべく各種祭典に奉仕してきたが、此程大規模な祭典に奉仕する機会は過去に無く、祭典全般の準備段階から見学する機会を得て靖國神社職員の緻密なる祭運びの一端に触れられた事、地方の護国神社職員にとって経験する機会の少ない靈璽奉安祭並びに合祀祭への見参さらには当日祭に於いて、陛下よりの勅使を先導する任に服した事は生涯忘れ得ぬ経験となろう。

当職も奉職時に崇高な理念と希望を抱いて斯界に入門したものとの「言易行難」で、神職としての月日が経過する程に奉務の細部に心を込める難しさを痛感する次第である。此度の奉仕で山口宮司以下靖國神社職員の真摯なる奉仕姿勢と御祭神に対する真心に触れた事で、己の至らぬ点を正し、初心のまま日々奉仕しようとの思いを新たにした。

当職に奉仕の機会を与えてくれた関係各位に深謝すると共に、靖國神社御社頭の弔榮を祈念す。

6月	全國護國神社會臨時總会 宮司出席 ～8日	13日	宮司出席 ～8日
	第五十三回旧海軍司令部壕 慰靈祭 事務局長参列	7日	神道青年九州地区研修会 関口権禰宜オンライン参加
	天皇皇后両陛下印度尼西亞 共和国御渡航行幸啓安泰祈願祭	8日	令和五年度第二回責任役員会 SYDボランティア友の会
	久留米予科官学校第十一期 海上挺身鎮魂碑慰靈祭 宮司奉仕	9日	「沖縄を考える会」正式参拝
	音更神社 宮司 佐々木敬様 自由参拝	10日	丹羽様 正式参拝
4月	茨城県連合会青年部 正式参拝 秀平良子様他 正式参拝	11日	対馬丸慰靈祭 会長参列
	65回春季例大祭宵宮祭 第65回春季例大祭	12日	TUMUGI JAPAN 正式参拝
	「あゝ特攻」勇士之像慰靈祭	13日	終戦記念日みたま祭り
	昭和祭	14日	神社ナビタ設置奉告祭
	音更神社 宮司 佐々木敬様 自由参拝	15日	全日本学生会議 自由参拝
5月	沖縄インターなショナル スクール 自由参拝	16日	茨城縣護國神社前宮司 佐藤昭典様 正式参拝
	県内神社見学会 第二班出発 第一班出発	17日	波上秋大祭 宮司参列
	沖縄祖国復帰記念祭 正式参拝	18日	天皇皇后両陛下印度尼西亞 共和国御渡航還幸啓奉告祭
	防府天満宮禰宜 一木孝史様 正式参拝	19日	空の神兵顕正会 奥本康大様 正式参拝
	波上宮例祭 宮司参列	20日	夏越の厄除け祈願祭 大祓式
6月	天久宮例祭 宮司参列 小禄地域振興会良縁祈願 滋賀県遺族会 正式参拝	21日	産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
	令和五年度第一回責任役員会	22日	三日間の旅御一行様 正式参拝 NPO法人空援隊 海軍司令部壕 での遺骨収集に参加 宮司・関口 権禰宜、宮崎神職、友寄録事 しづたまの塔慰靈祭
	11日 県内神社見学会 第二班出発	23日	4日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
	15日 沖縄祖国復帰記念祭 正式参拝	24日	5日 三日間の旅御一行様 正式参拝 NPO法人空援隊 海軍司令部壕 での遺骨収集に参加 宮司・関口 権禰宜、宮崎神職、友寄録事 しづたまの塔慰靈祭
7月	16日 防府天満宮禰宜 一木孝史様 正式参拝	25日	6日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
	17日 波上宮例祭 宮司参列	26日	7日 三日間の旅御一行様 正式参拝 NPO法人空援隊 海軍司令部壕 での遺骨収集に参加 宮司・関口 権禰宜、宮崎神職、友寄録事 しづたまの塔慰靈祭
	18日 滋賀県遺族会 正式参拝	27日	8日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
8月	19日 長崎県連合遺族会 正式参拝 慰靈巡回団慰靈祭 宮司参列	28日	9日 三日間の旅御一行様 正式参拝 NPO法人空援隊 海軍司令部壕 での遺骨収集に参加 宮司・関口 権禰宜、宮崎神職、友寄録事 しづたまの塔慰靈祭
	20日 華道池坊沖縄支部 正式参拝	29日	10日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
	21日 高知県遺族会 正式参拝	30日	11日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
9月	22日 長崎県連合遺族会 南方地域 慰靈巡回団慰靈祭 宮司参列	31日	12日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
	23日 広島県遺族会 正式参拝	1日 表千家同門会沖縄支部 神道政治連盟東京都本部 自由参拝	13日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
	24日 長崎県連合遺族会 南方地域 慰靈巡回団慰靈祭 宮司参列	2日 沖縄煎茶道協会 正式参拝	14日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
10月	25日 烧津中央高校有志職員 自由参拝	3日 因伯の塔慰靈祭 前原松元権禰宜助勤奉仕	15日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
	26日 九州地区護國神社宮司会 宮司出席 ～7日	4日 明治祭遙拝式 華道家元池坊沖縄支部 正式参拝	16日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
	27日 前沖縄県神社廳長	5日 小笠原流煎茶道沖縄總支部 佐賀県遺族連盟 正式参拝	17日 産経義烈空挺隊の足跡をたどる 殉葬学徒顕彰七十八年祭
11月	28日 前安大孝翁命波上宮神社葬 未安大孝翁命波上宮神社葬	6日 山口県遺族連盟 正式参拝	18日 佐賀県遺族会 正式参拝
	29日 表千家同門会沖縄支部 神道政治連盟東京都本部 自由参拝	7日 岡山県遺族連盟 正式参拝	19日 静岡の塔慰靈祭 宮司参列
	30日 岐阜県遺族会 正式参拝	8日 静岡の塔慰靈祭 宮司参列	20日 沖縄「甲斐の塔」慰靈巡回団 正式参拝
12月	31日 紀元祭 祈年祭	9日 長崎県戦没者慰靈奉賛会 正式参拝	21日 長崎県戦没者慰靈奉賛会 正式参拝
	1日 歳旦祭	10日 沖縄県神道青年会 謹参加	22日 東京都遺族連合会 自由参拝
1月	2日 節分祭	11日 日本和裁士会沖縄県支部 針祭	23日 第65回秋季例大祭宵宮祭 東京都遺族連合会 自由参拝
	3日 元始祭	12日 長野県遺族会 沖縄「信濃の塔」 慰靈巡回団 正式参拝	24日 第65回秋季例大祭
2月	4日 熊本県遺族連合会 正式参拝	13日 紀元祭 祈年祭	25日 沖縄県神道青年会 謹参加
	5日 大阪府遺族連合会 正式参拝	14日 神道政治連盟大阪府本部 正式参拝	26日 沖縄県神道青年会 謹参加
	6日 JYMA日本青年遺骨収集団 正式参拝	15日 神道政治連盟大阪府本部 主催 安全保障シンポジウム 前原権禰宜助勤奉仕	27日 沖縄県神道青年会 謹参加
3月	7日 沖縄県神道青年会 謹参加	16日 全國護國神社社會令和六年度定例 総会 宮司出席	28日 沖縄県神道青年会 謹参加
	8日 岩手県遺族連合会 正式参拝	17日 第十一回社殿造営委員会 総会 宮司参列	29日 沖縄県神道青年会 謹参加
	9日 那霸青年會議所餅つき奉仕	18日 春季皇靈祭遙拝式 S.Y.D.ボランティア友の会 正式参拝	30日 沖縄県神道青年会 謹参加
4月	10日 戰歿者慰靈の会 櫻街道	20日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	31日 神道政治連盟沖縄県本部主催 令和五年度第四回責任役員会
	11日 神符守札焼納祭	21日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	32日 MAGATAMA 正式参拝
	12日 大分の塔慰靈祭 宮司参列	22日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	33日 集合意識覚醒プログラム 前原権禰宜助勤奉仕
5月	13日 未吉宮例祭 宮司参列	23日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	34日 千葉県遺族会 正式参拝
	14日 埼玉県遺族連合会 正式参拝	24日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	35日 特攻隊戦没者慰靈顕彰会 靖國神社秋季例大祭
6月	15日 爽南地区遺族会 正式参拝	25日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	36日 松元権禰宜助勤奉仕 ～19日
	16日 兵庫県遺族会 正式参拝	26日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	37日 波上秋大祭 宮司参列
7月	17日 爽南地区遺族会 正式参拝	27日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	38日 沖縄神社例祭 宮司参列
	18日 日本国會議沖縄県本部 「美しい日本の 憲法をつくる国民の会」 正式参拝	28日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	39日 千葉県遺族会 正式参拝
8月	19日 徳島県遺族会 正式参拝	29日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	40日 茶道裏千家沖縄支部 神道裏千家沖縄支部 正式参拝
	20日 新潟の塔奉賛会 正式参拝	30日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	41日 特攻隊戦没者慰靈顕彰会 靖國神社秋季例大祭
9月	21日 茨城県遺族連合会 正式参拝	31日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	42日 松元権禰宜助勤奉仕 ～19日
	22日 大分県遺族会 正式参拝	1日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	43日 波上秋大祭 宮司参列
10月	23日 爽南地区遺族会 正式参拝	2日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	44日 沖縄神社例祭 宮司参列
	24日 爽南地区遺族会 正式参拝	3日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	45日 千葉県遺族会 正式参拝
11月	25日 爽南地区遺族会 正式参拝	4日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	46日 特攻隊戦没者慰靈顕彰会 靖國神社秋季例大祭
	26日 爽南地区遺族会 正式参拝	5日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	47日 松元権禰宜助勤奉仕 ～19日
12月	27日 爽南地区遺族会 正式参拝	6日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	48日 波上秋大祭 宮司参列
	28日 爽南地区遺族会 正式参拝	7日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	49日 沖縄神社例祭 宮司参列
	29日 爽南地区遺族会 正式参拝	8日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	50日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝
	30日 爽南地区遺族会 正式参拝	9日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	51日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝
	31日 爽南地区遺族会 正式参拝	10日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝	52日 沖縄京都の塔奉賛会 正式参拝

ご祭神の 遺籍調査について

現在、各地の護国神社がご遺族・崇敬者の方の参拝が減少しているため危機に瀕しています。護国神社中最多の十七万七千九百十四柱がお祀りされている当社においても例外ではなく、例えば春秋の例大祭において昭和四十年代では実に、七・六千人の参列がありましたが、現在は三百名を切るような状況となっております。

先の大戦で県民の四人に一人が散華された沖縄県に住む多くの人が遺族と言つても過言ではありません。当社では随時御靈とのお繫がりを証明する祭神調査書の発行や、ご命日の日に御靈を慰靈安鎮する永代慰靈命日祭のお申込みを承っております。御靈が最もお喜びになるのは、ご子孫の方のお顔を見出してくれるという事であるとご拝察申し上げますので、この機会に是非お問合せ下さい。

※御来社される日が分かりましたら、事前にお電話頂けると幸いです。

※ご希望に応じ、軍歴証明書の取り方や、厚生労働省が実施している、遺骨収集事業にて御帰国されました遺骨のDNA鑑定のご案内、その他、可能な範囲内で関連団体（戦友会・遺族会・遺骨収集団体・慰霊団体）のご紹介やお取次ぎを致します。
詳しくは当社までご連絡ください。

【調査対象のご祭神】

当社に合祀されている全てのご祭神
十七万七千九百十四柱

県内出身の対象

屋比久孟治命をはじめ、十二万九百八十二柱
※日清戦争・大東亜戦争にて散華された軍人・軍属の方。沖縄戦において散華された民間人の方。

県外出身の対象

牛島満命をはじめ、六万六千九百三十三柱
※沖縄戦において散華された県外出身の陸海軍の軍人、軍属の方。

※沖縄方面に出撃された特攻隊員の方や、天二号作戦参加者、義烈空挺隊員等も対象となります。

【ご依頼主様の条件】

ご祭神のご家族様

※ご家族様であれば直接の血縁関係は問いません。

※プライバシー保護の観点からご家族様以外の調査（研究目的を含む）についてはお受けできかねます。

【必ずご持参いただくるもの】

・ご依頼主様の身分証明書
(保険証・運転免許証・マイナンバーカード等)

【ご持参いただけるとよいもの】

※必須ではありません。

・軍歴証明書

・ご依頼主様とご祭神の繫がりがわかるもの
(戸籍謄本等)

・ご祭神の本籍や生年月日がわかるもの
・その他、ご祭神に関係する資料

書籍紹介

『ずっと、ずっと帰りを待って いました：「沖縄戦」指揮官 と遺族の往復書簡』

若干24歳にして一個大隊を率い、五月の総反撃では棚原高地奪還の武勳をあげ、部下将兵の9割を失うも終戦時まで国吉台陣地を保持し続け、最後は「大隊は完敗したわけではない。陛下の命により武器を置いたのである」という思いで米軍に投降しました。

た大隊長がいます。名前は伊東孝一。伊東氏の胸に常にあったのが、靖國・護國の御社へ旅立たれた部下将兵の事であります。氏は復員後すぐに六百通にわたる手紙と、珊瑚、そして戦死現認証明書をご遺族の元に送ると、356通の返信がありました。伊東氏は当初この手紙を公表せず棺に入れ茶毬にふすよう遺言をしていましたが、最終的には沖縄戦の真実をより多くの人に伝えてほしいと著書である浜田哲二氏、浜田律子氏に託されました。両氏は20年以上にわたり沖縄の地で遺骨収集や遺留品の返還を行ってこられた御仁であり、その活動地点の一つが国吉台であった縁もあり伊東氏に手紙を託されたのです。本書は、復員された指揮官と散華された家族をもつ遺族との往復書簡を通した魂の振れ合いの軌跡、そしてその送られてきた手紙を再度送り主の元に返還するというプロジェクトを通じて、英靈の生きた軌跡や愛する家族を亡くしたご遺族の戦後史を描いた作品です。



『読む年表 太平洋戦争 ：開戦から終戦まで 1396日の記録』

皆さんは先の大戦についてどのくらい知っていますでしょうか。近しい方が関わった個々の戦闘や、事変、或いは兵器等について詳しいという方は大勢いらっしゃるかと思います。しかし通史となるとどうでしょうか。

例えば戦史叢書第102巻の「陸海軍年表 付・兵器・兵語の解説」は非常に精緻に事象が書かれていますが精緻に書かれすぎているが為に全体を俯瞰して見渡すことが難しいという側面があります。その点この度ご恵贈頂きました、本書はあくまで「いつ、どこで、何があったかを知る」という事に重点を置いていますので、詳細な記述は避けられています。ですので個々の事象を始めて知る人にとっては平易で分かりやすい記述それ自体がより深い学びの為の一助となることでしょう。

大局的な歴史の大きな流れを知るというのは、個々の事象をより深く知るための手がかりとなるかと思います。ですのではこの機会に本書をお手に取られ先人たちが勇戦敢闘した大いなる時代、そして大東亜戦争に関わる諸地域に思いを馳せて頂ければ幸甚です。